第十八条　軽きと云ふと早きと云ふと差別有る事

底本：高知本　対校本：なし

【翻刻】

第十八　かろきと云とはやきと云と差別有事

舌の軽といふは、音曲者のさひわひなれとも、此比の人ハしたのはやきをかろきとほむる事おほし。是またあやまりなるへし。かろきはやきハ、似てにさる事也。又静なるとしたるきと別義也。かろき早きも其通にて御座候。書進上致すに不及。御気を付られ候へは、しれ申事にて候。大様舌のさきかろく文字をあつかひてよし。吟する時ハしつかなるやうにうたふを舌かろきと云なり。但、文字分もなくかろくハあつかわぬ也。

【校異】

対校本なし。

【語釈】

○**舌の軽き**…舌を軽快に扱う様。「軽し」とは、軽快であることを示す。世阿弥『申楽談儀』「心根」の条（第十二条）に「此一うたひ、かかりて、軽く謡ふべし」とある。

○**舌の早き**…舌を早く扱う様。

○**静なる**…ちょうど良い具合にゆうゆうと、幽にやさしく行う様。『八帖花伝書』第七巻の囃子への言及において、「静かなるとは、乗りてよき位に行く、先立ず、後へも退らず、ゆるゆると真に幽をあらせて囃すを、静なると申候」とある。なお、次の「したるき」の説明を含め、『八帖花伝書』の本条はほぼそのまま『小鼓口伝集』（天文二十三年〈一五五四〉、宮増弥左衛門）に見出せる。

○**したるき**…締まりがなく緩んでいる様。しだるき。『八帖花伝書』第七巻に、「静かなる」の説明に続けて「したるきと申は、位、謡の跡へ退りたるを、したるきと申なり」とある。囃子の位が謡に比して劣っていることを言い、囃子方に締まりがなく緩んでいる様子を指す。

○**あつかふ**…（文字を）声に出して読む、謡う。

○**吟ずる**…詩歌などを声に出して唱う。吟詠する。世阿弥『曲付次第』に、歌の詠吟について「又、詞の吟を本風にして詠み続くる詠音なれば、五音にも通じ、文声にも正しき道なる程に、歌の詠吟、音曲に合はずと云事なし」とある。ただし、「吟ず」の例は能楽書にはあまり見られない。

○**文字分もなく**…文字一字一字を謡い分けることなく。世阿弥『音曲口伝』には、冒頭条に「文字をば口びるにて分かつべし」と見え、音曲の習い様に二つ挙げられている中に「又、謡ふ人の、節を付て、文字を分かつべき事、一也」とある。すなわち、文字を一字ごと明確に謡い分けることが肝要であるとされている。

【現代語訳】

第十八　軽きと言うと早きと言うと差別有ること

舌が軽いというのは、音曲に携わる者にとって幸いなことであるが、この頃の人は、舌の（動きの）早いことを軽いと褒めることが多い。これはまた誤りである。（舌が）軽いのと早いのとは、似て非なることである。また、「静かなる」（ちょうど良い具合にゆうゆうと謡うこと）と「したるき」（締まりがなく緩んで謡うこと）とは別のことである。軽い・早いというのもそれと同じことである。あえて書いて進上することではない。お気を付ければ、わかることである。おおよそ舌の先で軽く文字を発音するのがよい。吟詠する時は、静かなる様で謡うのを舌が軽いと言うのである。但し、文字を分かつことを明確にしないで軽くは発音しないものである。

【解説】

舌の「軽き」ことは、「早き」とは異なるということを、謡の「静かなる」と「したるき」の違いを援用しながら説明する条である。舌先を早く使うのは褒められることではなく、舌先を軽やかに文字を発音するのが良いと言う。

『八帖花伝書』には、次のようにある。

一、囃子の、早きと軽きと、したるきと静かなるとは、大なる変りにて候。軽きと申は、乗りてよき図にする〳〵と行くを、軽きと申候。石車に乗り、片拍子に先立つを、早きと申候。静かなるとは、乗りてよき位に行く、先立ず、後へも退らず、ゆる〳〵と真に幽をあらせて囃すを、静かなると申候。したるきと申は、位、謡の跡へ退りたるを、したるきと申なり。是、大きなる変りなり。

（第七巻）

右は囃子の説明であるが、早き・軽き、したるき・静かなるの対比において、本条と通ずる説明がなされている。また、『観世道見書物』には、「舌軽くいふ曲の事」として、

ここに軽きといふをはやきといふ事、似たる物也。かろきハよし。はやきハわろし。静なるはよし。したるきハわろし。如此心得て、軽く言ふやう、縦ば、舌をよくかへして字を短く舌の先にて字をあつかいて言へば、舌かろき曲と成る。謡は静に文字をはやく言ふべし。文字のわけもなく字にもあたらで、さだめなきやうに謡へハしたるきならん。

とある。舌が軽いということの意味や、舌軽き曲の説明がなされ、やはり早き・軽き、したるき・静かなるの対比が用いられる。

『うたひ鏡』本条は、これらと共通する部分が多いが、最後の部分に「吟する時はしつかなるやうにうたふを舌かろきと云なり」と記し、ちょうど良い具合に乗りがよく、幽にやさしく謡う意の「静かなる」が、すなわち「舌軽き」とも言うのだとする点で特徴的である。

（柴　佳世乃）